

# 生き残る意味の探求と調査への旅立ち

—『ホロコーストの子供たち』に寄せる—

浜谷正晴

はじめに

『ホロコーストの子供たち』\*の主題は、『ホロコーストを生き残った人びとの子供たち、すなわち生命の力が破壊力をしのいだ証としての新しい葉たちが、その自身は決して生きたことのない歴史にとらえられた生を、どのようにして生き抜いていくか』にある。

それは、自身生き残りの子のひとりである、著者ヘレン・ユブスタインの魂の記録であり、彼女の仲間たちとの対話の記録である。

本稿は、このドキュメントを通して、調査の成り立ち—社会調査史のごとく歴史的な意味ではなく、一個の

人間が自らの問題をときあかす営為としてのそれ——について、考察しようとするものである。

\* Helen Epstein, *Children of the Holocaust: Conversations of the Sons and Daughters of Survivors*, Bantam Books, New York, 1979 (トランミン和世訳「朝日新聞社」一九八四年)

本文中に引用した箇所は頁数は邦訳のもの。引用にあたり、一部要約した部分がある。

— 「鉄の箱を一緒にのぞいてくれる仲間」をもとめて

1 「鉄の箱」iron box (第一章)

「何年もの間、何かが、私の心の奥底ずっと深く埋ま

っている鉄の箱の中に横たわっていたけれど、いったいそれが何なのか、私には全然わからなかった。……それはあまりにも強烈で、いい表そうとすれば、言葉はもうくも崩れさった。」(三頁)

本書はこのような書き出しから始まる。

その「鉄の箱」におしこめられたものは、ときに、①「小さな女の子ならだれでも見てはならないもの」②血と、砕けたガラス、山と積まれた骸骨、肉片がこびりついて黒ずんだ鉄条網、子供の靴、鞭、長軍靴、針、等であった。また、ときには③強盗や人殺しに不意に襲われる、「七番街行きローカル電車が、ポーランドに向かう家畜列車に姿をかえる」恐怖であり、④焼きつくされ、いまは根株をとどめるのみになった「家族樹」の墓であり、⑤六百万人のユダヤ人がナチの手によって殺害されたという「歴史的事実」であったりした。

同時に、鉄の箱には、「父と母のために温室のようにぽかぽかと暖かい特別室」があった。ヘレンの両親は、強制収容所を生きのび、生き残った「七万五千人に満たない人々」のうちの「二人」であった。

「両親が死の淵を越えてきたこと、それぞれたった一

人で、それを越えてきたことには気がついていて。私が両親にとっての最初の仲間であり、新しい葉っぱであること、そしてこの葉は、まじりけなしの生命そのものでなければならぬことも知っていた。この新しい葉は生命の力が破壊力をしのいだという証拠であり、両親の生命が尽きずに生きのびたという証だった。」(六頁)

ヘレンはこの鉄の箱を「学校で習った原子炉を建てる方法と同じくらい念入りに」つくりあげ、「脳からはるかに離れていて、私の身体中で、いちばん活発でなまざるうな、ウエストのくびれの後ろ側に」埋めこんだ。

## 2 「仲間」company(同)

だが、ヘレンが成長するにしたがい、鉄の箱は「消化しきれないものでぎゅうぎゅう詰めになり、ついには無視し続けることが出来なくなつて」いった。

「あまりにも心の奥底にひそんでいるので、いままで一度もほかの人に喋ったことのない秘密を解く」ためには、それに「近づこうとするたびに感じる、痺れたような感覚の帯を断ち切るための作戦」が必要であった。

「この中を一緒にのぞいてくれる仲間が、私の心の中に貯めこんできたと思っっているものは実在する、でっち

あげたものではないとうけあってくれる仲間がほしかった。」(七頁)

著者は、「世界のあちこちに散らばった」、「独自の鉄の箱をそれぞれの心に抱いて生きている人たち」を探しはじめた。「私と同じように、自身は決して生きたことのない歴史にとらわれている一群の人々を」。「その人たちにさまざまな質問を投げかけ」、「その話に耳を傾け、収集するために。」

3 「第一步」 on the first leg of a journey (第二章)

ヘレンは一九四七年一月ブラハに生まれてまもなく、両親に連れられてアメリカに移住した。「心の痛みと本気で取り組んでみよう」と決心して、カナダのトロントに「第一步」を標すまでには、およそ三〇年近い歳月がたっていた。一九七七年春、ヘレンは「二十九歳のニューヨーク子で、大学教師であり、二十歳のときから新聞や雑誌に記事を書いている物書き」になっていた。

トロントに飛んだのは、アメリカ南部で育ち、一九七〇年にある州でユダヤ人としては最初に「ピュートイー・クイーン」に選ばれた「異色の存在」、デボラ・シュワルツと会うためであった。新聞にのったデボラの特別記

事を読んだヘレンは、デボラが「生き残った人の子供」として自分を率直かつ「落ち着いた口調」で認めていることに、「目を見張る思い」と「とまどい」を覚えた。

なぜなら、ヘレンのそれまでの経験において、「両親ハ強制収容所ニイマシタ」というのは「私が引いたこの線を越えないで下さい」という警告であり、両親が「獣よりひどい状態におとしめられた」事実を否定するのと同じ意味をもっていたからである。

ヘレンは「自分がとんでもない厄介なことを持ち込もうとしているでしゃばりのような気」がしながら、デボラの家ドアをノックする。デボラの「青い瞳には、親密さとよそよそしさがほどよく混じりあっていた。」

「もしかしたら彼女は、私がどんなふうに住事をするか見てから、信用するに足りる人間かどうか決めようと思っているのだろう。」「彼らがそうする前に、私自身、生身の傷つきやすい人間だということを証明してみせなければならぬ……。」(一五頁)

4 「開眼」 revelation (同)

そこへ、デボラが呼んだ、アーウィン・ダイアモンドとイーライ・ルービンスタインが現れ、途中から、デボ

ラの弟ジョセフも加わった。アーウィンもイーライも二十九歳で、二人とも生き残りの人の娘と結婚していた。イーライはこういった。

「自分が子供を育てるといふのは、ホロコーストといふ恐ろしいものに立ち向かい、ぼくの家族を含めた六百万人の死は無駄ではなかったことを証明する、唯一の方法のような気がするんです」と。(一六頁)

それから、イーライの長い独白がはじまった。イーライは、①戦争で死んだ家族の名をもらったこと、②両親の生活は「戦前と戦後という二つの部分」でできていて、子供の頃「その謎を解明しよう」とするより、「それと一緒に生きてきた」こと、③両親の腕に刻まれた入れ墨の数字や位置を覚えてもいないこと(それは「あの苦痛を思い起こさせる、決して消し去ることのできない焼き印」であった)、④両親は「敵がぼくらの財産を取り上げるかもしれないが、受けた教育は取り上げることができない」といったこと、⑤「なぜ神さまが何百万人も無実の男や女やそれに子供たちまで殺されるにまかせたか、という根源的な問い」を抱いてきたこと、⑥「自分と過去との関連をうちたててみたい」と、父の故郷ハンガリ

ーの小さな村へ行って見たが、自分が「異なった天体からやってきた」ような「居心地」をあじわい、「あんなに自分とはかけ離れた出来事のような気がしていたことが、ずっと身近に感じられるようになった」こと、⑦両親が「威厳をもって生き抜き、その後残されたものをなんとかかき集めて素晴らしい新しい生活を築き上げたことに對して、限らない賛嘆を捧げる」こと、⑧「何かが起こってしまった後に生まれると、やり場のない怒りを感じる」こと、⑨将来、「いまに恐ろしい仕方で、代償を支払わなくてはならなくなるのではないか」という怖れと不安をかき消せないでいること等、まるで「何年も機会を待っていたような具合」に語った。

そのことにイーライ自身が驚いているように見えた。後に彼はヘレンにこういった。「話しているうちに、これまで一度も口にすることはなかったがずっと前から知っていた物事が、意識の上ではっきり形をとるようになった。あれはぼくにとって、一種の開眼だったよ」と。(二六頁)

5 「共感」responsive chord (第二～三章)

ヘレンも「胸がときめき出した。」「はじめて訪ねた町

で、はじめて会った人が、私自身の経験が現実存在していること (the reality of my own experience) を証明 (confirm) してくれたのだ。」(二六頁)

デボラの家でのこの五人の出会いには、「各自の性格、信仰心の有無、生活様式、抱負、信条の違いを超える」親密さを生み出して終わった。その後すぐに、ヘレンは彼女が会った生き残った者の子供たちのうちで、「最も共感を覚えた」ロシエル(イーライの妹)に出会う。

戦争について話すとき、いつも著者が感じるのは「霧のように覆う、冷たい防音毛布のような無感動 (numbness) だけ」であった。しかしロシエルの話を聞きながら、ヘレンは「その下の方に、奥深いところで、まるで砂洲が崩れていくように、何かが後退していく」のを感じていた。

「その晩、タイプライターに屈み込み、テープレコーダーから聞こえてくるロシエルの声を聞きながら、私は泣きだした。そして、私がいままで自分に思い出すことを決して許さないできた数々の思い出に、身を委ねた。」

(三八頁)

## 二 生き残った者とその子供たちの間

ロシエルとの間に、互いの心の琴線にふれあうものを感じた、と著者はいう。それは、ヘレンの「無感動」を突き崩し、彼女の「鉄の箱」の扉をあけさせた。いったいそれは何だったのだろうか。

それは、生き残りの子としての自らの生にたいする著者の立ち向かい方とかかわるものであるが故に、一で紹介した導入部につづく、本論のテーマとその展開とに密接に関連するものであるに違いない。

『ホロコーストの子供たち』は、とくに標題のない全二〇章からなっている。以下、③各章においてどのような『子供』が登場し、何が論じられているか、④その事例のもつ意味は何か、⑤どのような関連の下に、それぞれの章が配置されているかを明らかにしながら、本書の構成をおさえてみることにしよう。全体を大きく二つに分けて説明する。

〔第一部―ブローグ〕(第一―第三章。既述)

〔第二部―ヘレンの思い出〕(第四―第六章)

まず、生き残ったヘレンの両親の苦しみと彼らがわが

子にたくす期待とがつくり出す、緊張をはらんだ家族関係(第四章)と、ヘレンの出生の重さ、つまりヘレンの母が強制収容所から解放された後、著者を生みおとすまでの「漂泊」と再起への過程(第五章)が描かれる。

【第四章】ヘレンは「私たち一家が生存しているという事実をはじめとして、当たり前のこととして受け取っていいことは、一つもなかった」が故に、次々と疑問を抱く、「なぜ?」と。母にとって「子供とは、未来に向かって伸びる若葉以上のもの」であり、父も家族を「理想化」していた。だが、「父の期待の数々、閉めきった換気の悪い工場での生活からくる父の欲求不満は、私たちの振る舞いとしょっちゅう衝突した。疲れ果て、お金や、母の健康への気掛かりで、その楽天主義もすり切れてしまふと、恐ろしい怒りが迸り出た。」ヘレンには、「両親の体験を考えれば、どうして幸福で健康で素直な娘でなくていられよう。」彼女は「あれは本当は起こらなかったことなのだ。あんなことが起きたというのを信じることを拒んだ。

【第五章】一九四五年四月一五日に解放された母は、療養の後、ブラハに帰る。が、身近だった人々は「消え去

って」いた。「無感動が母の性格の一部」になり、まるで「抜け殻」であった。その「漂泊の旅に終わりを告げる」ために父と結婚するが、母は「もう一つの死」(another loss)につながるかもしれない妊娠を「身体ごと拒否」する。両親はその恐怖とたたかって、ヘレンを生んだ。

著者は五章の末尾を「私が頭から先にこの世に姿を現した」と結び、つづいて生き残った者とその子供たちが置かれた歴史的・一般的状況について考察していく。

【第六章】ホロコーストの生存者の惨状はまず、「難民問題」として知られるようになった。世界の各地に散らばった「新参者」たちは、「尊敬と疑りの念の混じりあった気持ちをもって迎えられた。」一九五〇年代、ドイツにおける連邦損害賠償法と連邦補償法の制定によって、補償を受けるための「健康診断と精神科の診断」が開始された。著者は「生き残り症候群」survivor syndromeや「広範囲にわたる精神的外傷」massive psychic traumaなど、精神分析的な研究の概略を紹介しつつ、「生き残りの人々の家族内における親子間の関係については、ほとんど何も知られていない」ことを指摘し、ホロコー

ストが「歴史上の出来事」になっていると批判する。

【第三部―親と子の間】(第七、十一章)

ここには、ヘレン自身のこと(第九章)を間にはさんで、六人の子供たちが登場する。それらの対話を再構成する視点は、「生き残りの人々の家族内における親子間の関係」が子供たちにかなる苦悩・葛藤をもたらしただか、に据えられている。

【第七章】 サラとアヴィヴァ 二人はともにイスラエルに移住した生き残りの子供であるが、後者は「ホロコーストは悪影響をあたえていない」といい、イスラエルの「開拓者精神」に自己を一体化するのに対し、前者は自己を「流れ者」ととらえ、「生き残りの人々は、イスラエル人の横に並ぶと恥ずべき存在になってしまふ」とする。著者はサラが、前章の研究論文に述べられた特徴を「あまりにもはっきりと自分のうちに認め」たことに屈辱を感じ、そこに「本当にあったのだということ否定したい」自分の願望を見出す。

【第八章】 ガブリエラ・コルダとフランク・コリン 前者は「安全を確保する」ために「南米でプロテスタントを装って」育てられ、「二つの顔を持つ人生」を歩む。

著者はガブリエラが両親によって「ドイツ人の子」として育てられ、「自分の親族の大部分を殺すのに手を貸した文化を崇め奉る」ことに衝撃を覚える。しかし、その後、この「攻撃者との同一化」(identification with the aggressor)は、他の子供たちにも存在することを認識させられる。その一人がアメリカのナチ連合のリーダーとなった、フランクである。

【第九章】 ヘレン ガブリエラによってよびまされた子供時代の記憶。ユダヤ教の日曜学校と神の問題。日曜の午後、郊外での両親の仲間たちとの出会い。「起こったことを正確に知ってほしい」という両親から、「すべて生か死か、忠誠か裏切りか」に絡んだ話を聞かされ、また聞き出そうとしていく著者。それは「譲られた人生」(assigantion)としての自意識を形成するが、「ぼんやりと何となく子供時代を送る自由を奪われた」ヘレンは、「普通の子になりたい」と葛藤する。

【第十章】 ジョセフ・シュワルツ 他に生き残りのいない南部の田舎町で、「経済的安定を第一に目ざして心を砕く」両親のもとに育つ。彼にとって、両親は「人間を超えた者」であり、家族は「忠誠を誓うべき第一の対象」

であった。幼い時、「倫理」について考えた少年は、成長するにつれ、親がアウシュヴィッツをもちだすと表情を閉ざし、「反抗的で喧嘩好きの、癩癩持ち」になる。

【第十一章】 ルース・アレクサンダー ルースには、十歳のころ、家のなかに漂う「虚無感」と「絶望感」とに「毎晩泣き出さずにはいられない時期」があった。「浸透作用」のようにして入りこむ「あの恐ろしい知識」は、彼女が「子供らしい子供」でいることを許さなかった。「負け犬としての感覚」をもつ黒人青年との恋愛を通して、テレンス・デブレの『生存者』を知り、「なぜ、常に最悪の場合を予想し、自分を苦しめるような状況にわが身を陥れようとするのか」がわかり、「自分自身の抱えている問題と両親の戦争体験」との関係にはじめて気づかされる。

生き残った者を親にもつ子供の凄じいまでの葛藤については、後の第十六章においても、両親が子供に伝える「矛盾した二つのメッセージ」(a double message)として再言される。つぎに、九章からその部分を要約する。《両親が喋ることは、すべて生か死か、忠誠か裏切りか、といったことが絡む話だった。戦争が巨大な津波のよう

に押し寄せてくるのが見え、自分の悩みなんか縮んで、どうということもなくなってしまった。私の心の鉄の箱は、そんなとき、怒りを燃やし尽くしてエネルギーを生み出す熔鉱炉になった。その吐け口が見つかからないときは、よくかっとなって喧嘩を始めた。その怒りの感情は、私の中に閉じ込められ、とぐろを巻いていたので、ときには脚に痛みや疼きをひき起こすほどだった。

自分の人生が自分のものでないような気がした。私という人間を通して、何百人もの人が生きている。私の生命は譲られた人生なのだ。

私は普通の子に——奇跡の子でも何でもなく、歴史とは無関係に、ただ何となく生まれてきた、普通の子になりたかった。両親がどうしてこの自分らは生きてあそこを出られたのだろうか、何千回目に不思議がるとき、二人の結論はいつも、私たちという子供をつくるためだったのだ、ということになった。そのことは私を震え上がらせた。それゆえ、私はぼんやりと何となく子供時代を送る自由を奪われたのだ。私は日曜の午後、難しい顔をして森の中をうろつき回った。》(一五七〜九頁)



## 三 生き残る強靱さを求めて

それでは、生き残った者の子供たちは、この「譲られた人生」と「普通の子」との間に生ずる葛藤・矛盾を、どうのりこえようとしてきたのか、また、どうしたらのりこえられるのか。本書の後半は、この問題をめぐって展開される。

## 〔第四部―特定の世界観〕(第十二章)

著者は後半への展開にあたって、生き残りの人々の子供に関するこれまでの研究結果を整理・検討する章を設けている。

【第十二章】①「生き残り症候群」は、多くの生き残りの人々が共有する論証可能な数々の特徴をとらえてはいるが、「歴史的、文化的、社会的考慮を欠く、極端に狭い否定的な定義」である。それは、子供たちが「両親のうち目目の当たりに見つめてきた強靱さ」を、両親が「生き残るための素晴らしい技術を身につけた」ことを無視している。②「ナチ・ホロコーストの第二世代に及ぼす影響」という問題は、近年、最新のトピックにさえなったが、症例数からいって実質的といつてよい研究は、

極めて少数である。③両親の戦争体験が子供にもたらしたものは、「五指にも満たない数の臨床的症狀ではなく、特定の世界観」(a particular world view)とみるべきである。

ここについては、若干の説明が必要である。まず、「強靱さ」・「技術」の意味は、つぎの部分に明らかである。

「母は私に一度、こういった」とヘレンは語る。「三年間強制収容所において、人間の性、忠誠心、裏切りなんかについて、それは多くのことを学んだのよ。耐え忍び、生き、価値観を整理するための、とびきり濃密な教育だったわ。あの当時、人生で何が大切か決めなくてはならなかったとしたら……。一言で、あれは何だったかと思われれば、『人道主義に基づく、仕上げの花嫁学校』(humanitarian finishing school)だった、と思うのよ。」両親が「切り抜けてきたことは、本で読んだり、学校で習ったものの何にもまして、やむにやまれぬ迫力をもって私に迫ってきた。」(一五五頁)

このような言葉は決して、ホロコーストを肯定するために表されたものではないことに注意しておくべきであろう。ホロコーストに対する人間のたたかいを表出する

言葉として理解さるべきである。

つぎに、「特定の世界観」とは、左記のことを指している。

「私が話す機会を得た生き残りの人々の子供たちは全員、口を揃えてこういった。ドイツという国に対する、あるいはホロコースト体験に対する両親の態度を、自分たち子供は浸透作用のように吸収した、と。子供たちは、こう感じるとか、ああ感じるとか、特別に指示されたこととはない。そうではなく、言葉には決して出されない両親の態度や願望を、無意識に拾い上げながら育ってきた。その上、両親と自分をあまりにも同一視化しすぎたため、戦争中に形づくられた両親の姿勢が、子供自身のものとなってしまった。」(一二六頁)

〔第五部「生き方」(第十三、十六章)〕

しかし、この世界観は、そのままでは生きる方向や生き方を与えてはくれない。それを得ようとして、子供たちは激しい模索をつづける。

【第十三章】 アルバート・シンガーマン 「自分がいった何を悩んでいるのかわからなかった」アルは、「ベトナムに行きさえすれば、ぼくも生き残りの一人になれる」

と思い、「志願」して参戦する。帰還した当初は、「自分が生き残ったことで、得意の絶頂にいた」という。「圧迫者の側に立つことは、自分自身を裏切ることだ」とするヘレンは、「自分がベトナムでやってることと、第二次大戦とを結びつけて考えてみたことはなかったのか」と問う。

【第十四章】 イエフダ・コヘン 十六歳のとき、イエフダはシオニストの青少年グループ「ハボニム運動」に加わる。そこに「ユダヤ人としての歴史感覚」を求めた彼は、イスラエルに行き、「心にびったり呼応するもの」を感じる。

【第十五章】 ヘレン、およびトマス 著者も一九六七年から三年間、イスラエルに行った。その年の「六日戦争」が、「どうして行かないで済まされよう」とヘレンを駆り立てた。と同時に、「ホロコーストはユダヤ人にアイデンティティーを授けるには授けたが、人生への処し方のヒントも人生の組み立て方も与えてくれなかった」からであった。当初、「イスラエルの一部になる」という「変身」はなめらかだったが、次第に「離れ去ろう」とするようになる。ユダヤ人は「戦争で勝ち取った土地の支

配者」となったし、またホロコーストについての「対話の場」も意欲もそこにはなかった。ヘレンは、「ユダヤ人国家建設」のために参戦した父親に置き去りにされたチエコの青年トマスに出会う。

【第十六章】ヘレンおよびマルク 著者は「いかなる災難が降りかかろうと生き残れる自信」を身につけるために、「苦難」を味わおうとさまざまに試みる。一度は、国境の入植地で知り合った「ワルシャワ・ゲットー生まれ」のマルクに誘われ、「社会の底」に沈み込んでみようとする。やがて彼女は、「憂愁」がマルクとその友人たちの「他の性格を覆い隠して」いることに気づき離れる。(後年、ヘレンは自分がマルクを「手段」として利用しようとしていたことを自覚させられる。)ヘレンの「犠牲者との一体化」(identification with the victim)の試みは、「もし必要なら、苦難を耐え忍び、戦争を生き残ることができるといふ自信を得させたが、同時に「苦難が必ずしも人間の性格に高貴さを与えるものではない」こともわからせた。著者は「イスラエルの未来に限られた可能性」しか見出すことができなかった。

〔第六部―共同体〕(第十七―終章)

イスラエルから帰った著者は、「苦難」への一体化という方法を捨て、むしろ生き残った両親とは異なる、子供たちの独自性への自覚を強め、「苦難」それ自体の意味を追求し始める。

【第十七章】デボラ・シュワルツ 一九七〇年夏、デボラはミス・アメリカ美人コンテストの準備に熱中していた。デボラにとって優勝は「ヒトラーやナチズムに打ち克つことであり、ホロコーストを生き残った両親の勝利」を意味した。タイトルは取れなかったが、州のビューティー・クイーンとしての一年間を最大限に活用し、生い立ちについて語り、政治犯の窮状やソ連におけるユダヤ人の処遇について訴えた。「善良であることが、おぞましい体験を克服する両親なりの方法」であったことを受け継ぐデボラにとって、結婚は断ち切られた「鎖をつなげる」ものであり、自分の子供に早く「祖父母」をもたせてやることであった。

【第十八章】トム・リード トムの両親は強制収容所に送られてはいなかった。だが彼は、ドイツ系ユダヤ人難民の子としての「精神的遺産」を負っていた。この「両親の戦争体験を基に芽を吹き、成長し、使命感を心に抱

く第一世代のアメリカ人は、イエール大学に入って後、「歴史的主題の眞の現実」にぶち当たり、「成功、再生、雪辱」というベースを保つことができなくなる。「あの精神的遺産は、エネルギーと精神的支えは与えてくれたが、進むべき方向はまったく教えてくれなかった」とトムはいう。彼は「成功」を捨て、「自分が無視し続けてきた問題に終止符を打つ」ために、「家族の歴史」を調べ始める。トムは最後にこういった。「ぼくはいままで存在しなかった共同体 (community) を生み出す手伝いをしたい」と。

【第十九章】ヘレン「共同体」。それはトロントで最初のインタヴューをするまでの七年の間、著者も「探し求め、そんなものは存在しない」と自分にいい聞かせてきたものであった。その間、ヘレンは歴史の本や個人的証言、精神医学的研究書、文学を読み漁り、またウィーナ口述歴史記録館の「生存者の身の上を記録する」企画に加わった。そして一九七七年秋、「ホロコースト生存者とその子供たちのためのグループ・プロジェクト」の最初の会合がニューヨークで開かれる。ヘレンはそこに、「共同体」の出現を見た。

【終章】ヘレン 父の死。「死んだら火葬にしてくれ」という生前の願いをかなえ、父の遺骨を山に残して去るとき、母は「あれから後の年月は、残りは、素晴らしい贈り物だったんだよ」という。それから「解き放たれたかのように」、母は話をしだした。会話を「こもらせがちにしていたぎごちなさ」が、遂にとれたのだ。

『ホロコーストの子供たち』終章は、家族がそれぞれに「事実を受け入れた」(learned) という内容で締めくくられている。このことの意味は、次章であらためて検討することしよう。

#### 四 『ホロコーストの子供たち』の視点と方法をめぐって

##### 1 ふたたび「共感」について

こうして、その構成方法の把握を通して、『ホロコーストの子供たち』全章を読み終えたいま、二の冒頭に提示した問い、著者がロシエルとの間に抱いた「共感」の意味について再び立ち戻ることしよう。

第三章におけるロシエルとの対話には、著者その他の子供たちとの間に生じたような緊張した場面が存在しない。

むしろヘレンは、「ひとしきり、言葉がとりとめもなく飛び出してはまた口をつぐむ」ロシエルの自己抑制的な話しぶりに親近感を覚え、「あなたの話していることは重要なことなのよ、と自信をつけてやりたいような気持ちになった」と述べている。この「共感」の中身を直接ものがたるのは、つぎの箇所である。

「最も重要なのは、両親が苦しんだということ、そしてその結果、いまは脆い人たちだということなの。両親に対して腹を立てる権利はないの——それなのに、思い出せる限り、わたしが怒りを感じた相手は、両親だけだったのよ。わたしに重荷を負わせたのだから。」／「どんな重荷だったの。」私は、答えを知っていながらたずねた。／「両親の身に起こったことすべてを償う (make it) ために、わたしが『幸せ』でいなくてはならなかった、ということ。それは大変な責任だった。」(三四一―五頁)

これは、第四章における「両親の体験を考えれば、どうして私が幸福で健康で素直な娘でなくていられよう」というヘレンの思いと呼応する。この問題は、本書前半部における分析視点でもあった。「共感」の第一の意味

は、「鉄の箱」をのぞく視点をヘレンに与えたことにある。同時に、看過してならないのは、ロシエルが自分の問題に立ち向かっていったときの方法のことである。

「自分には何か助けが必要だ」とわかったロシエルは、美術療法を勉強しようと思いつつ。治療士に「自分の感情に深く入り込み、それについて考えないようにしてごらんさない」といわれ、ちょうど「度々襲われるあの感情」とらえられていた彼女は、それを絵に描いてみる。その作品は、ロシエルにとって「生まれて初めて」、彼女の中の「醜い、憎悪の感情」を外に現したものとなった。同じクラスのイギリス系婦人たちに乞われて、両親が強制収容所にいたことを説明しながら、ロシエルは質問に「答える機会を与えられた」嬉しさと、「本当にわたしを理解しよう」と努めてくれている「婦人たちの姿勢を感じとる。彼女はヘレンにこう語った。

「霧がかかったような気持ちは、もうなかった。幾千ものイメージが、一時に見えた。子供だった頃に見たり聞いたりしたものの、それがみんな一時にやってきた。外に表すことをかたく禁じてきた、激しい、暴力的な感情が。／あのことすべてについて、実際に何かを感じた

(any real kind of emotion) のは、それが初めてだった」と。(三八頁)

この話は、ヘレンが自身の体験や感情に入り込むことを妨げてきた「無感動」という心理的障壁をとりさる方法に大きな示唆を与えたに違いない。「共感」(struck the most responsive chord) の意味は、以上のように、視点と方法という文脈において明確になるのである。

## 2 対話 conversations

本書冒頭の謝辞には、本文に実名あるいは仮名で登場する生き残った人々の子供たちの他にも、著者が何百人かの子供たちと話や便りを交わしたことが記されている。

この対話は、ときに、ユダヤ人としてあるいは生き残りの子供として「登場」する心の準備のできていなかった者との出会いであり、ときに、ガブリエラの「攻撃者との同一化」やアルが「ベトナム帰り」であったことが引き起こしたように、話の途中で「心のスイッチ」を切らせ、長い間「一番下の引き出しの奥深く」しまいこまざるをえなくさせるものであった。また著者は、「例外的存在」として片づけてしまいたいようなことどもについて、他の生き残りの子供たちと「関連させて」理解で

きるようになるまでには、自身の「精神的成長を待たねばならぬ」かったことを記している。

第十九章で著者は、この対話を思いついたときのことについて、こう述べている。

「ほかの人たちのこと(生存者の個人的証言)を読むにつれ、両親の話を書く際につきまとうっていた痺れたような感覚は消え去り、もっとありのままに受け入れられるようになっていた。生まれて初めて、両親の人生を、他の人々の人生と関連させてみる事ができるようになった。一度も会ったことのないこの人々が、私の両親の死んだ家族の代わりになってくれた。そして、そのとき、この人々の子供たちと話をしなくてはならない、と思いついたのだった」と。(三二五頁)

この対話は多くの子供たちにとって、生き残りの子として話す最初の体験であった。それは、それぞれに「自分が何を悩んでいたのか」を気づかせた。だが、そのことは他者からの働きかけがあって初めて、生き残りの子としての精神的営為が開始されたことを意味してはいない。サラが「いままであまりにも長い間よけて通ってきた仕事が残っている。わたしはもう三十歳だし、このこ

んぐらがりをはじめ、糸の両端を見つけるときだ」といったように、その営為は著者一人のものではなく、彼らのうちにも存在していたのである。対話は、その営みを自覚的なものにさせたといふべきであろう。

### 3 第二の世代 another generation

すでに言及しておいたように、第十九章のテーマは「共同体」にあった。著者において、それは「仲間」たちによる集団的主体性の確立として把握されている。

三年にわたるイスラエルでの体験は、ヘレンに「生き残る強靱さ」は単に「両親が蒙った苦難と一体感を得る」というやり方だけでは得られないことを教えた。

「私が、両親とは異なる独自の歴史を持っていることに気がついた。私はニューヨークに育った。プラハではなかった。私の好み、価値観、人生に対する抱負は、もちろん中央ヨーロッパ系ユダヤ人としての生い立ちから形成されたのだが、それと同様に、アメリカによっても培われたのだ。」(二八九頁)

この「独自の歴史」は、ホロコーストにとりくむ主体的条件において、二つの世代の間に「重要な相違点」をもたらしした。

「当初は、生き残りの人々の子供たちの問題は、これから専門家グループによってのみ解明されると思われた。

少なくとも、私たちの両親の場合にはこれが当てはまらなかった。しかし二つの世代には、重要な相違点が存在する。

両親は、人生の半ばに達してから新しい国に移住し、たいていの場合、学者や専門職のような仕事にはつかなかった。一方、生き残った人々の子供たちの方は、両親が移住した先のそれぞれの国で、教育程度のずばぬけて高いグループに属している。」(二〇九頁)

この「教育」とは、ヘレンたちにとって、誰によっても「取り上げることができない」ものであり、彼らの両親が「欠いていた」、「イメージをただすために必要な手づる」であり、「感情的 (emotional) エネルギ」を動員するものであった。

このような意味での「ホロコースト第二世代」の独自性と可能性の認識は、著者のつぎのような体験に支えられている。イスラエルを去ろうと決心したとき、周囲の人々は「イスラエルはユダヤ人の唯一の生きる道だといふことがわからないのか」といい、それが「個人的な侮辱であるかのように反応した」。そのことについて、へ

レンはこう述べる。

「私の両親の体験が、そういうことを私に教えてくれたことは、決してなかった。それどころか、両親の教えてくれたのは、どんな種類の教義も絶対的と見える解答も疑ってかかれ、ということだった。これが、私の中に、心の奥底深く横たわる抵抗力を生み出した。すなわち、私がどんな人間であるべきでどう行動すべきか、と定義してかかる力に抗する力を生み出した」と。(二一九〇頁)

#### 4 「心の問題」 emotions

この「抵抗力」は、本書第六、十二、十九章における歴史批判、精神療法的研究批判として結実した。「歴史の本が、ある時代を説明しようと思図しているのに、その記述を読んでいる私にはさっぱり理解できないのはなぜか」と自問しつづ、著者はアルの言葉を引く。

「もしぼくらが、心の問題を抜きにして、ホロコーストについて研究することになったら、ぼくらが次の世代に伝え得るのは、その統計の数字だけになってしまう」と。(三二二頁)

ここにいう「心の問題」とは、「平和条約が結ばれた時

点でびたりとおさまるわけにはいかない『破壊』の人間的な意味であり、それを思想化しようとする人間の意思であり、実践である。

『ホロコーストの子供たち』は、『自身は決して生きたことのない歴史をいかに生きるか』ということを提起する。このテーマは、『体験していない人間が、他者の体験にいかにして接近しうるか』という問題につながっている。

イエフダはいう、「その人々が一生かかっても出来ないほど、それをよく理解していると自負している」と。その人々とは、「ホロコーストについてのドキュメンタリーを観たり、本で読んだりする人々」のことである。

しかし、むしろ著者はこのドキュメントをつくりあげた視点と方法によって、イエフダがいう「自負」を突き崩し、のりこえたということができないのではないであろうか。著者が明らかにしたのは、つぎの点である。

第一に、生き残った者の子供であること、それだけでは自分が何に悩み、いかに生きるべきかはわからないこと。そのために、彼ら自身が自己対象化の営為を必要としていたということ。したがって第二に、そうした営み



によってその意味を試された思想や生き方を見出し受け継ぐべきであること、である。

このことは、生き残った人々の子供たちではない私たちが、ホロコーストに接近することを排除しない。むしろ、その可能性をおし広げるものということができる。

おわりに

いま、われわれは、生き残ることを未来に当然の前提としない状況におかれている。そして、『ホロコーストの子供たち』が描き出しているひとつ一つのことに、いろいろと思ひ当たることの少なくない状況のなかに、われわれは生きている。決して無縁とはいえない切れないものが、そこにある。この状況のもつ意味をとらえ、そこから生き残る方向を探る上において、『ホロコーストの子供たち』は大変示唆的である。

著者は、「原爆投下後の日本人コミュニティーの崩壊

の研究は、私自身の置かれた状況を理解する上で重要な鍵を与えてくれた」と述べている。原爆被害の全体像の構築をめざしている筆者には、ヘレンとはちょうど逆のことがあてはまる。原爆が生み出した〈地獄〉と生き残った被爆者の〈惨苦の生〉をとらえる上で、ホロコースト研究に学ぶことは少なからぬものがある。

とりわけ、『ホロコーストの子供たち』に対応する被爆者の子供たちの問題は、わが国においてそれが主に遺伝の不安の問題としてのみ論じられるために、むしろ避けて通っているのが現状である。本書は、被爆者の子供たちの問題に立ち向かうための確かな鍵を与えてくれるということが出来る。だが、そのことに踏み込めるには、筆者の「精神的成長」を必要としていることもまた、確かなことである。

(一橋大学助教授)